

日 本 独 文 学 会

2005 年秋季研究発表会

研 究 発 表 要 旨

2005 年 10 月 9 日 (日) ・ 10 日 (月)

第1日 午前 9時50分より

第2日 午前10時00分より

会場 同志社大学 新町キャンパス

目 次

第 1 日 10 月 9 日 (日)

シンポジウム (10:00 ~ 13:00)

C 会場 ... 1

アーダルベルト・シュティフター 1805/2005

イメージ・空間・記憶

Adalbert Stifter 1805/2005: Bild, Raum und Gedächtnis

司会: 七字 眞明・須永 恆雄

- | | | | |
|-------------------------|-----------------|----|----|
| 1) 『みかげ石』 | 記憶と空間の奥行き | 松岡 | 幸司 |
| 2) 記憶のなかの園亭 | | 磯崎 | 康太 |
| | シュティフターの語りえない欲動 | | |
| 3) 絵画に向けられた「視線」 | | 七字 | 眞明 |
| 4) シュティフターの視覚をめぐって | | 須永 | 恆雄 |
| 5) シュティフターの「自伝的断片」をめぐって | | 松村 | 國隆 |

シンポジウム (10:00 ~ 13:00)

C 会場 ... 12

言語変化の諸相 うちとそと

Sprachwandel - inner- und außersprachlich betrachtet

司会: 齋藤 治之・河崎 靖

- | | |
|--|--------|
| 1) schlafen gehen と gelaufen kommen をめぐる一考 | 檜枝 陽一郎 |
| 察 Reinke de Vos/Reinaerts Historie を中心に | |
| 2) 認知言語学的観点から見た意味変化現象 | 薦田 奈美 |
| 3) 『枠外配置』に見るドイツ語統語構造の歴史的变化 | 平井 敏雄 |
| 4) アスペクト表現としての haben+過去分詞 | 金子 哲太 |
| 動詞組織の変革におけるその発生のプロセス | |
| 5) 再帰動詞と他自動詞の歴史的変遷 | 嶋崎 啓 |

口頭発表：文学（10:00～12:00）

D 会場...16

司会：伊藤 富雄・加藤 丈雄

- 1) アイヒとナチスとの親和性 放送劇『黄金都市
における反乱』の発見に端を発して 青地 伯水
- 2) 文学史概念「シュトゥルム・ウント・ドラング」の発
生とその行方 今村 武
- 2) ヴィルヘルム・ミュラーのイタリア体験 今本 幸平
旅行記『ローマとローマの人々』について
- 4) ヘルダリンを解読するヘリングラート 西井 美幸

口頭発表：語学・ドイツ語教育（10:00～12:00）

B 会場...19

司会：下村 喜八・橋本 政義

- 1) 古ザクセン語における否定構文について 本多 修一
Heliand を資料に
- 2) コミュニカティブ・アプローチの理論的源泉と母 中川 亜紀子
語話者信仰
- 3) 言語についてのポートレート 森田 昌美
学習者が語る言語学習歴
- 4) Bier, Würstchen, Hitler?! Matthias Grünewald
- Methoden, Ergebnisse und Konsequenzen einer
Studie zu den Deutschland- und Deutschenbildern
japanischer Deutschlernender

ポスター発表（10:00～13:00）

G 会場...22

ベンヤミンのエッセイ 青年の形而上学 における
死の意味 ベンヤミンによるヘルダーリン・ヘリ
ングラート受容を中心に

小野寺 賢一

シンポジウム (14:30~17:30)

A 会場...23

トーマス・マン『魔の山』の「内」と「外」 新たな解釈の試み
Neue Innen- und Außenansichten von Thomas Manns *Der Zauberberg*

司会：福元 圭太

- | | |
|-------------------------------------|--------|
| 1) 『魔の山』第7章後半をめぐって | 友田 和秀 |
| 2) 「忘却と想起の物語」としての『魔の山』 | 小黒 康正 |
| 3) 「祝福せられたる食物摂取を！」
『魔の山』における食の情景 | 柏木 貴久子 |
| 4) 魔法の山の東へ | 田村 和彦 |

シンポジウム (14:30~17:30)

B 会場...26

市民社会における暴力とジェンダー
Gewalt und Gender in der bürgerlichen Gesellschaft

司会：佐藤 文彦

- | | |
|---|-------|
| 1) もう一つのジェンダーイメージ
18世紀末の女性劇作家 | 菅 利恵 |
| 2) クライストの描く「武装した女性」たち | 川島 隆 |
| 3) セリーヌにおける女性像と「マッチョ」の問題 | 早川 文敏 |
| 4) インゲボルク・バッハマンの暴力の記憶をめぐる
言説 | 高井 絹子 |
| 5) DDR 末期社会のなかの《小市民性》
クリストフ・ハインの初期作品を中心に | 國重 裕 |

シンポジウム V (14:30~17:30)

C 会場...30

ニューメディアに映じたドイツ語の最前線
Neue Entwicklungen des Deutschen in den Medien von heute

司会：渡辺 学・高田 博行

- | | |
|------------------------------------|-------|
| 1) マンガ・コミックのドイツ語
オノマトペの翻訳法をめぐって | 細川 裕史 |
|------------------------------------|-------|

- | | |
|---|-------|
| 2) 携帯メールのドイツ語
日本語の事例も参照して | 渡辺 学 |
| 3) チャットルームで交わされるドイツ語
文字を用いた協調のストラテジー | 白井 宏美 |
| 4) 電子掲示板 (BBS) に書き込まれるドイツ語
推敲された「逸脱」 | 高田 博行 |
| 5) メーリングリストのドイツ語
ドイツにおける新たな表現形式について | 山下 仁 |

口頭発表：文学（14:30～16:30）

D 会場...35

司会：三ツ木 道夫・金子 孝吉

- | | |
|---|--------|
| 1) ホーフマンスタールと日本
ラフカディオ・ハーンの与えた影響 | 関根 裕子 |
| 2) 切り裂かれた眼 ルイス・ブニエルの『アン
ダルシアの犬』とパウル・ツェラーンの『ことばの
格子』における「切り裂かれた眼」についての一考察 | 三ツ石 祐子 |
| 3) 地球を孕ませる新しい精神貴族
ムージルの『特性のない男』より | 横道 誠 |
| 4) Ein deutscher Schnüffler. Jakob Arjounis Stefan Buchenberger
hart gesottener Privatdetektiv Kemal
Kayankaya und seine amerikanischen Vorbilder. | |

ポスター発表（13:30～16:30）

G 会場...39

- | | |
|---|------|
| <ニューイヤール・コンサート> とマス・メディア
クレメンス・クラウスの未発売放送用アーカイブ
録音とその考察 | 佐藤 英 |
|---|------|

第2日 10月10日(月)

シンポジウム (10:00~13:00)

A 会場...42

ドイツ文学と美術

Deutsche Literatur und bildende Kunst

司会：西村 雅樹

- | | | | |
|------------------------|--------------|----|----|
| 1) 絵の中の言葉 | リヒテンベルクとホガース | 濱中 | 春 |
| 2) 小説の中の絵 | ゲーテからケラーまで | 松村 | 朋彦 |
| 3) ヘルマン・バールと「ウィーン分離派」 | | 西村 | 雅樹 |
| 4) ローベルト・ムージルと新即物主義の絵画 | | 水藤 | 龍彦 |
| 5) トーマス・マンとカリカチュア | | 千田 | まや |

シンポジウム (10:00~13:00)

C 会場...46

演劇のパラダイム転換と新しいタイプの戯曲テキスト

Der Paradigmenwechsel des Theaters und Dramentexte neuen Typs

司会：谷川 道子

コメンテーター：栗山民也(新国立劇場監督)

- | | | |
|-------------------------------|----|-----|
| 1) 戯曲テキストを研究するということ | 中島 | 裕昭 |
| 2) 演劇と音楽の間
マルターラー演劇の合唱について | 平田 | 栄一郎 |
| 3) ドイツ現代演劇に対するオーストリア的(?)視点 | 寺尾 | 格 |
| 4) 「演出家の演劇」の今日における姿 | 新野 | 守広 |

口頭発表：文化・社会 (10:00~12:30)

D 会場...51

司会：斎藤 治之・奥田 敏広

- | | | |
|---|----|----|
| 1) メディア論としてのグラフィックデザイン
ヤン・チヒョルトと「ニュー・タイポグラフィー」 | 大村 | 幸太 |
| 2) 魂たちの宇宙 シュレーバーの『回想録』におけ | 熊谷 | 哲哉 |

るカール・デュ・プレルの影響について

- | | |
|--------------------------|--------|
| 3) シューベルト『冬の旅』における『おやすみ』 | 田島 昭洋 |
| 4) ドイツ語・日本語政治討論と論証様式 | 宮内 敬太郎 |
| 5) ヘルマン・コーヘンにおける知識の体系と宗教 | 向井 直己 |

ポスター発表 (10:00 ~ 13:00)

G 会場...52

音声コミュニケーション中心の少人数授業で学習者は
何を学んでいるのか？

「ドイツ語チュートリアル」の試み

星井 牧子
生駒 美喜
室井 禎之
Michael Schart
井口 三奈子

第1日 10月9日(日)

シンポジウム (10:00~13:00)

A会場

アーダルベルト・シュティフター 1805/2005 イメージ・空間・
記憶

Adalbert Stifter 1805/2005: Bild, Raum und Gedächtnis

司会: 七字 眞明・須永 恆雄

アーダルベルト・シュティフター(1805-1868)の作品は、その処女作『禿鷹(コンドル)号』が示しているように、ビーダーマイヤー期の作家という、従来の文学史的位置づけをはるかに超えて、1990年代後半以降、記号論、あるいは脱構築を方法論とする新たな読みの可能性を探る場となっている。『Text+Kritik』(2003年)の特集号(160号)における、ミヒャエル・シェッフエルの研究小史は、シュティフター作品の理解が、時代とともにその姿を変えてきた様子を端的に示している。

すでにニーチェ、あるいはトーマス・マンらにより指摘されていた、シュティフターのテクストが示す問題性とは、一見破綻の無い「穏やかな」テクストに施された数々の記号の仕掛け、そのテクストの表面に走る亀裂から垣間見える異常性、そして表象不可能な領域へと立ち入ろうとする瞬間の眩暈にも似た感覚さえをも内包する、重層的なテクスト背後の世界である。

本シンポジウムでは、5名の発表者が、シュティフターの後期作品を取り上げ、テクストを新たに読み解く可能性を提示することを試みる。その際、「イメージ」、「空間」、「記憶」といったテーマが、多くの試みに共通して取り上げられることになるが、これは、こうしたテーマ群に議論を収斂させることを意図するものではもちろんなく、むしろ、これらのテーマを基点として開かれた議論の場を提供し、それを通じてシンポジウムの参加者のうちに、シュティフター作品の多様な読解の可能性が認識されることを目指すものである。この共同作業の結果として、本年生誕200年を迎えるシュティフターのテクストに今日われわれが対峙する意味を探り出すことを当シンポジウムの目的とする。

1) 『みかげ石』 記憶と空間の奥行き

松岡 幸司

シュティフターの描き出す風景・自然には、「個」と「全体」が兼ね備わっている。一本の木、ひとつの石、道端の草から森の広がり、山並み、村の点在する一地域へと、彼の描写には「個」から「全体」へのつながりがある。その好例が、「穏やかな法則」の提示で知られている序文を持つ短編集『石さまざま』(1853)の最初の作品『みかげ石』である。隣り村までの道行きに孫を連れ出した祖父は、故郷の森、山、村など、その一つ一つを確認し、孫の中に定着させ、かつてその地に起きたペスト襲来のお話を語ることで、記憶の流れを生み出す。孫の内では、故郷の空間の中で結びつく点の集合に時間という線的要素が加わることにより、故郷の空間に存在するもの全ての中に記憶という形で時間が定点化される。つまりシュティフターの自然描写におけるミクロ的・マクロ的な特性は、空間的・時間的な連続性をも併せ持つのである。本発表では、『みかげ石』の中に表される自然描写が深めて行く空間と記憶の奥行きを手がかりに、シュティフターの抱いていた時間と空間の感覚について読み直したい。

2) 記憶のなかの園亭 シュティフターの語りえない欲動

磯崎 康太郎

昨今なお、シュティフター研究の課題であると指摘されているのが、テキストへの文化研究的なアプローチである。本発表では、19世紀前半の文化史的記述を顧慮しながら、シュティフター最晩年の随筆『園亭』(1866)を中心に考察する。シュティフターの描いた閉鎖的空間の一例としての園亭は、従来、「安全」、「居心地よさ」、「秩序」等の意味を担うものとして捉えられてきた。しかし、シュティフターのこうした閉鎖的空間は、これまでの考察以上に多様な意味が付与されていると考えられる。『園亭』におけるこの空間は、個人が瞑想や回想に耽るばかりではなく、多民族が集まる、公共的な場所としても描かれている。それと同時に、「無垢であって欲しい」という作者の願望が述べられる、極めて私的な、恋愛にまつわる場所でもある。このことは、園亭が「閉鎖性」、もしくは「隔離性」を示唆する記号となり、秘められ

た性愛が記憶から呼び起こされていることの表れであると考えられる。病魔に冒され、衰弱していた最晩年のシュティフターから、意識的な操作をかいくぐって現出した恋愛の記号は、『石灰石』(1853)、『晩夏』(1857)等、すでに『園亭』以前に書かれていた小説における、無邪気な子どもたちのやりとりにもその姿を見せており、欲動が潜む場所と化している。

3) 絵画に向けられた「視線」

七字 眞明

生涯にわたり自ら絵筆を手にしたのみならず、美術展の批評を数多く著してもいるシュティフターの散文作品に関しては従来より、エクスラシスあるいは「ウト・ピクトゥーラ・ポエシス」といった、文学と絵画の両芸術領域を横断する問題群が、文体論を中心とする研究の枠組みとして様々な形で設定されてきたが、作品中に登場する「絵画」という仕掛けそのものを直接的に論じた研究は少ない。

文書と並行して、記憶と記録のためのメディアとしての役割を絵画、とりわけ肖像画が担うかたわら、氾濫する絵画作品に取り囲まれ映像の世界に陶酔し夢想する主人公が、絵画に視線を投げかけることを通じて、絵画作品として表現された「現実」という表象の欺瞞を予感し、「ありのままの現実」をキャンバス上に再現する試みを断念して、自らが生きる世界を「現実」として受け入れる自己省察の契機となるなど、シュティフターの作品中に登場する「絵画」には虚実両世界を取り結ぶ往還としての多様な機能が付与されていることが予想される。本発表では、シュティフターの後期短編作品を中心として、絵画作品に向けられた「視線」と、その「視線」が惹き起こす「表象」をめぐる問題という観点から作家のテクストを読み直すことの可能性について検討する。

4) シュティフターの視覚をめぐる

須永 恆雄

すぐれて視覚的な作家シュティフターの作品におけるさまざまな視

覚の様態を考察する。空間を眺望する視点、回遊して空間の中に分け入り迷路をくぐる道行きの視線。前者は自ら籠もる棲家の定点からの望見であり、後者は庇護された場所を出て一所不在の彷徨に身を任せる寄る辺ない移行するまなざしである。三次元の立体を二次元の平面に定着するパースペクティブが解体して、高空からの極端な鳥瞰にみる均質に広がる厚みのない地図、または高さのない地面すれすれの蟻の視点から生ずる線條の一次元の世界が出現する。さらには密集する異物に塞がれ、あるいは闇に閉ざされることから閉塞空間を招来し、その一方では視線の侵入を拒む物質の密度をも透過して、足下の大地に奈落の幻視を誘き寄せる。そのとき日常茶飯の些事そのまま天変地異の暴力を潜め、平安な室内には魑魅魍魎が跳梁跋扈する、すなわち視る者を畏怖させるに足る怪異と化す。平穩無事にも破局を予感する過敏なまなざしの仕組みを探る。

5) シュティフターの「自伝的断片」をめぐって

松村 國隆

シュティフターの「自伝的断片」(Autobiographisches Fragment)は、一般に自伝と称されるものとしては唯一無比である。作家の最晩年に記されたこの草稿は人生のごく初期の段階で終っており、この世に生を享けてから幼児に至るまでの原体験が彼独特の想起と言葉の力によって展開されていく。それだけに自伝という性格は薄らぎ、むしろ作家の生に対する態度、あるいは書くという行為による原体験の定着という意味合いが強い。この「自伝的断片」はこれまでもシュティフター研究者によって折りに触れて論じられてきた。たとえば、彼の創作活動の基底をなすものとして、あるいは彼の文体にかかわる重要な言説として、さらには作家の生の根源を解明するものとして説明されてきた。そのいずれにも共通するのは、この断片がシュティフターとその作品を読み解く鍵として捉えられていることである。しかし、これを彼の最晩年の創作活動のなかに位置づける試みは、十分になされてきたとは言い難い。したがって本発表では、シュティフターの「自伝的断片」を1860年代における彼の創作活動と関連づけて、当時の作家が人生の最晩年において何をを目指していたのか、言い換えれば、何と向き合い、何に筆を託そうとしていたのかを明らかにしたい。

言語変化の諸相 うちとそと

Sprachwandel - inner- und außersprachlich gesehen

司会：齋藤 治之・河崎 靖

「言語はなぜ変化するのか、またそのプロセスはいかなるものか」という問題にいくつかの観点から考察を加えていこうというのが、今回のシンポジウムの趣旨である。この非可逆的で一定の方向性をもつ言語変化 Sprachwandel の過程に関し、それを誘引する要因を探るべく、言語内的・言語外的な立場から諸報告が行われる。シンポでは、言語体系内の要因だけでは必ずしも説明しきれないケースについて、方言変異の視点・認知言語学に基盤をおいたアプローチなどを用いて言語が変化していくさまを記述する。この際、言語変化を引き起こす要因をケース・スタディーを提示しながら説明しようという試みがなされる。併せて、シンポでは、言語内的なファクターに起因すると想定される言語変化のケースが、古語のサンプルに基づいて考察される。主に中世の資料に基づいた報告がなされるが、いずれも現代ドイツ語との接点への言及が含まれるものである。

シンポ全体として、言語変化の要因とはどのようなものかという統一テーマに向けて、さまざまな方法論でもってアプローチがなされ、こうした問題に関心を抱いておられる方々に何らかの形で語史的な発展傾向を示すことが、私たちシンポ企画者の狙いである。

1) schlafen gehen と gelaufen kommen をめぐる一考察

Reinaerts Historie/Reinke de Vos を中心に

檜枝 陽一郎

中世語の文法には、現代語の文法のみをじかに理解している者にとって、しばしば不可解に思える用法がある。本発表では、その一例として kommen や gehen などの移動を表す動詞がどんな動詞形態と結びつくことができるかに焦点を当てた。現代ドイツ語で schlafen gehen や gelaufen kommen に代表される用法である。

そこで kommen や gehen が中世語でどのような動詞形態と結びつく

かをReinaerts Historie(RH、中世オランダ語、14世紀後半成立)およびReynke de Vos(RV、中低ドイツ語、1498年)を中心にして調査した。両文献では、gehenがほぼ動詞不定詞と結びつくのに対して、kommenの場合は過去分詞および現在分詞、さらに不定詞と結びつく事例が確認される(RH:comen + gegaen、gaende、gaen、RV:komen + ghegaen、slykende、lopen)。RVはRHのいわば翻案であるので、RHの各事例のRVでの訳を検討すると、三様の用法にはっきりとした使い分けが確認され、他方、その後の展開が各用法に有利ないし不利に働いて現代に至っていることを示す。

2) 「認知言語学的観点から見た意味変化現象」

薦田 奈美

gehenやkommenといった動詞は、現代ドイツ語でin Erfüllung gehenやzum Abschluss kommenといった表現に見られるように、機能動詞として使用される際、状態変化を示す。このように、「移動」の概念の領域に存在していた動詞が、「状態変化」の概念を有するようになるというプロセスについて、認知言語学的な観点に基づいた説明が可能である。元来の「移動」という概念を構成する着点・起点といった要素と、「状態変化」という概念を構成する初期状態・結果という要素が、共通の構造を有するという人間の認識によって、概念構造そのものを変化させる。つまり、人間の認知プロセスが、全く異なった意味を想起させるきっかけを作り出している、と考えられるのである。同様に、語レベルの歴史的な意味変化においても、このようなプロセスが機能していると捉えることができるのではないだろうか。

意味変化現象については、従来通時言語学の分野において扱われてきた。しかし近年、上述のような認知言語学的な視点を取り入れた研究が現れてきている。本発表では、元来の意味が新しい意味に至る過程に注目し、辞書における語彙記述を観察する。言語に関する認知プロセスとして、重要な現象として扱われている、メタファーとメトニミーという概念を中心に、認知言語学的観点に基づいたアプローチがいかにか有効であることを示唆するものである。

3) 「 枠外配置 」に見るドイツ語統語構造の歴史的変化

平井 敏雄

現代ドイツ語では、導入辞を伴う従属文においては、原則として定動詞が文の末尾に置かれ (V/E)、いわゆる枠構造を形成する。古高ドイツ語・中高ドイツ語においても、V/E文は高率で見られ、V/Eが、少なくとも、導入辞を伴う従属文における基本的な語順のパターンの1つであったことは明らかである。

しかし他方、古高ドイツ語・中高ドイツ語には、導入辞を伴う従属文がV/Eを示さない例も多数見られる(例: dhazs dher selbo gheist ist got「この霊が神であるということ」(Isidor)。下線部が定動詞)。

文の枠の右側に構成素が取り出されるこうした語順は現代ドイツ語にも存在し、「枠外配置」(Ausklammerung)と呼ばれる。ただし、現代ドイツ語では、枠外に置かれうる構成素は前置詞句等一部のものに限定され、枠外配置は、V/Eという原則に対する一種の例外的な現象と見なされている。

本報告では、古高ドイツ語・中高ドイツ語におけるこうした語順を、枠外配置の一種であるという仮定のもとに検証し、Isidor(古高ドイツ語)及びTaulerの説教集(中高ドイツ語)をサンプルに、現代ドイツ語よりはるかに広範に用いられているこの語順の出現の条件を明らかにすることを試みる。

4) アスペクト表現としてのhaben+過去分詞

動詞組織の変革におけるその発生のプロセス

金子 哲太

動詞迂言形式の発達を見ると、態のカテゴリーではゴート語の時代にすでにseinやwerdenによる受動形式がかなり発達していた一方で、時制カテゴリーでは古高ドイツ語の時代にようやくhabenを用いた完了形式が散見されるようになるにすぎない。つまり古高ドイツ語の時代に至るまでゲルマン語は、ギリシア語やラテン語の豊富な時制体系を目の当たりにしながらも、現在と過去という2時制で、時間的・アスペクト的差異を表さざるを得なかった。

またアスペクト性の表示という観点から見ると、ゲルマン語は新し

く組織化された弱変化動詞の5クラスの語幹接尾辞によってこれに寄与していた。しかし動詞末尾音の弱化に伴ない、派生接尾辞によるアスペクトの差異は徐々に示されなくなっていく。その代わりに、すでにある程度発達していた接頭辞が部分的にその機能を担うようになるのと並行して、様々な動詞迂言形式が新しく発達していくことになる。

このように、文法形式にせよ派生手段にせよ、動詞が表す本来的な機能といえる時間的・アスペクト的意味をどのような形態手段をとって表示してきたのかというプロセスを踏まえた上で、完了相あるいは結果相を表示していたと考えられるhaben + 過去分詞がどのような要求のもとで生じ、どのような役割を担っていたのかを、その発生時期である古高ドイツ語の例をもとに考察する。また、現代語の現在完了を分析する際の何らかの手掛かりとなるような観点をも浮かび上がらせることができれば、と思っている。

5) 再帰動詞と他自動詞の歴史的変遷

嶋崎 啓

現代ドイツ語において sich öffnen のような再帰動詞と brechen のような他自動詞は、どちらも他動詞構文の対格目的語が再帰動詞および自動詞構文の主格主語になるという点で共通する。しかし歴史的に見ると、ゴート語の再帰動詞の主語は「人間」に限定されていたのであり、die Tür öffnet sich のように変化の対象が「物」になる用法は典型的ではなかった。再帰動詞は、der Mann öffnet sich (その男は自らを開いて見せる、姿を表す) der Mund öffnet sich (口が開く)

die Tür öffnet sich というように、「人間」のような内在的力を持つものの変化の表現から内在的力のない「物」の変化の表現へと用法を拡張した。現代語において再帰動詞の表す結果状態が「一時的」である場合が多いのは、再帰動詞が典型的には人間の変化を表し、人間の変化は「部分的」であることに因る。一方、brechen のような他自動詞は、対象の全体的変化を表す。従って、ich fahre sie zum Bahnhof のような随伴を表す動詞やich heirate sie のような相互動詞を除けば、変化の対象は典型的には「物」であった。他自動詞の表す変化の結果は「永続的」である場合が多いが、これは他自動詞が「全体的」変化を表すことに因ると考えられる。

口頭発表：文学（10:00～12:00）

D 会場

司会：伊藤 富雄・加藤 丈雄

1) アイヒとナチスとの親和性 放送劇『黄金都市における反乱』
の発見に端を発して

青地 伯水

1993年夏、プラハ近郊のプルシェロフで、すでに消失したと考えられていたアイヒのラジオドラマ『黄金都市における反乱』が、放送のための原盤の形で発見された。これによりナチスのもとでのアイヒが単に娯楽を提供する作家ではなく、ゲッベルスのプロパガンダの一端を担っていたという事実は疑いのないものになった。政治的にナイーブであった戦前のアイヒは、反キリスト教的円環思考、反都会的モデルネ、反アメリカニズム、反新即物主義といった保守革命の思想に基づき、ナチス体制下で多くのラジオドラマを発表したが、詩人としての本来のありかたを貫けない苦しみから、彼の心は次第にラジオの活動から離れていった。しかし軍務に忙殺される生活はさらに辛く、その場しのぎの休暇を得るには、プロパガンダ作品の創作に携わるしかなかった。

けれども、戦争の悲惨な体験をした後もアイヒの内奥を捉えていた思想は、保守革命と深く関わっていた。アイヒは詩『アウローラ』の中で、保守革命の本質をなす円環的時間においてギリシア・ローマの神々が、古典古代の文化が、廃墟となったドイツに「回帰」してくることを希求したのであった。それならば、アイヒを国民社会主義の礼賛者とまでは言わないにしても、ナチス体制下のアイヒの創作のすべてが心ならずのものとは言えない。保守革命の形を得てアイヒをナチスに近づけたドイツ的ルサンチマンは、不変の定数として戦後もアイヒの心に継続的に維持されていたのである。

2) 文学史概念「シュトゥルム・ウント・ドラング」の発生とその行方

今村 武

現在「シュトゥルム・ウント・ドラング」あるいは「疾風怒濤」はドイツ文芸学、ドイツ文学史のみならず英米文学史、フランス文学史、

さらには美術史、音楽史などの各分野においても用いられている。しかしその際この用語が各分野で「本家」であるはずのドイツ文芸学におけるそれとはかなり異なるニュアンスで用いられていることも指摘されている。

本発表は、ドイツ文学研究は「シュトゥルム・ウント・ドラング」にかんし一方では古典主義の準備段階、他方ではロマン主義の先駆的運動という理解を前提としてこの文学の考察を進めてきたことにより、その独自性、とりわけ疾風怒濤文学の美学的独自性、主題の革新性、啓蒙批判性を意識的あるいは無意識的に看過してきた。また最近約20年間のドイツ文芸学におけるシュトゥルム・ウント・ドラング研究の成果は学際的な理解と波及をいまだ得られず、他分野におけるこの用語の「恣意的」使用を誘発していると仮説を立てる。

その上でドイツ文学史におけるこの概念の変遷史を概観し、現在のシュトゥルム・ウント・ドラング像の成立史を明らかにする。その上で音楽学や美術史など他分野におけるこの用語の使用状況に一定の説明を施したい。続いて疾風怒濤文学の発生時点における文壇の様相を跡付け、その文脈と意味内容を検討する。一定の傾向と様式を持つ文学作品を指す用語としての「シュトゥルム・ウント・ドラング」の最初期の状態を検証することにより、ドイツ文芸学はこの用語をよりの確に定義することが出来るであろう。

3) ヴィルヘルム・ミュラーのイタリア体験

旅行記『ローマとローマの人々』について

今本 幸平

『ローマとローマの人々』(1820)は、ヴィルヘルム・ミュラー(1794-1827)が1817年から1818年にかけて行われた旅において、主にローマとその近郊に滞在した時の経験を踏まえて書かれた旅行記である。ミュラーは今日ではシューベルトの歌曲集『美しき水車小屋の娘』と『冬の旅』の詩人という面だけが強調されているが、ミュラーが最初に発表した散文作品であるこの旅行記には、これ以降本格化するミュラーの創作活動における基本理念とも言える見解が記されている。そこで本発表ではこの作品におけるミュラーの抒情詩創作の萌芽としてのイタリア体験について考察したい。

まずこの旅行記における古代ローマ時代の遺跡や芸術作品に関する記述から、大学で古典文献学を学び、古代ギリシア・ローマについて知識や関心を持っていたミュラーがイタリアでそれらをどのように鑑賞し、そこからどのような美しさを発見したのかをまず確認したい。そして旅行記の序文でも述べられているように、ミュラーはイタリアの民衆の生活について観察しているのだが、その中でもとりわけイタリアの民謡と即興詩人に関する記述を手がかりに、ミュラーの民衆観、民謡観について考察し、それらの見解がミュラーの創作にどのように繋がってゆくのかについて明らかにしたい。

4) ヘルダリンを解読するヘリングラート

西井 美幸

ヘルダリンの作品は、20世紀を迎えてから高い評価を得ることとなった。その端緒を開いたのは、古典文献学者ノルベルト・フォン・ヘリングラートがヘルダリンのテクストを読解する際に適用した、特殊な解読方法である。

ヘルダリンの作品草稿を発見した彼は、きわめて低い評価が定まっていたこの詩人に対する再検討を開始し、1910年に提出した博士論文で、ヘルダリンによるピンダロス翻訳の意義を説いた。

彼によれば、ヘルダリンが再評価されるべき点は、作品における語の独立性にある。抒情詩の文体を「なめらかな文結合」と「硬い文結合」に分けたギリシアの修辞学者にならい、ヘリングラートは「なめらかな接続」と「硬い接続」という区分を設定する。作品を構成する要素である個々の語が、自然に結びつき、融けあって、一つのイメージを形成するようにしているのが、「なめらかな接続」である。逆に、語同士がまとまって認識される可能性を消すために、通常の間文を破壊して、本来の各語をはっきり認識させるのが「硬い接続」である。まさにこの「硬い接続」を体現するのがピンダロスの文体であるが、それを忠実にドイツ語で再現することを試み、かなりの程度で成功しているのが、ヘルダリンの翻訳であり、創作作品であるという。

ヘルダリンを解読した研究者であるヘリングラートは、一方で、大戦勃発以後はそれに熱狂した一青年としても見なされている。時代の変化に伴い、彼自身も変化したのであろうか。彼が残した主張を考察

する。

口頭発表：語学・ドイツ語教育（10:00～12:00） B会場

司会：下村 喜八・橋本 政義

1) 古ザクセン語における否定構文について Heliand を資料に
本多 修一

最古のドイツ語の統語論研究については、これまで、テキストの制約と方言の多様性という二重の困難の故に、未開拓の部分が多い。しかし、近年、ドイツ語の統語現象を隙間なく通時的(diachronisch)に記述するためには、古高ドイツ語の統語論記述の重要性が求められている。例えば、Richard Schrodtt は、著書 *Althochdeutsche Grammatik* (2004, Tübingen)の冒頭で「古高ドイツ語の統語論を記述することは、冒険であり、言語地域の多様性、ラテン語への依存、韻と韻律の影響等で、古高ドイツ語の文法範疇を十分に記述することは難しい」と述べながらも、語群、格、アスペクト、時称、法、文の種類、語順等を包括的、かつ簡潔に記述している。

片や、古高ドイツ語と同時期の、低地ドイツ語の最初の言語段階と考えられている古ザクセン語の統語論については、これまで、ほとんど取り扱われてこなかった。本報告では、古ザクセン語の代表的なテキストである *Heliand* の分析を通して、1) 否定の不変化詞(Negationspartikel)のタイプを調べ、2) 否定の不変化詞の語順を調べ、3) 従来二重否定(Doppelnegation)という否定現象にとらわれずに、多重否定(mehrfache Negation)という枠組みの中で、否定構文のタイプを調査する。本報告の目的は、これらの作業を通じて、古ザクセン語の否定構文について体系的な記述を試みることと、古英語を視野に入れて、両言語(古ザクセン語と古英語)間の否定構文の共通性を探り、その仕組みを解明しようとすることである。また、否定詞の2つの機能、つまり文否定(Satznegation)と部分否定(Sondernegation)の可能性についても考察する。

古ザクセン語における多重否定構文については、言語内的な面からのみでなく、言語外的な面からも考察を試みたい。

1) コミュニカティブ・アプローチの理論的源泉と母語話者信仰

中川 亜紀子

異言語教育 / 学習における母語話者信仰（いわゆるネイティブ信仰）の背景のひとつとして、母語話者のようにその言語を用いることを唯一の正しい言語使用とする認識が見受けられる。つまり、母語話者がその言語を使用する際のコンテクストを学び、そのコンテクストにおいて母語話者のようにふるまうことが学習者には期待される。そのように母語話者のコンテクストと当該言語の言語使用を結びつけるものとして、教授法としてのコミュニカティブ・アプローチ（CA）との関連が指摘されているが、CA がその成立の過程において影響を受けたものとして言語行為論の存在が挙げられる。

言語行為論の創始者であるオースティンは、発話が置かれているコンテクストがその発話の効力を決定すると述べ、それまでの言語学ではみられなかった「行為」という切り口から言語を捉える独自の議論を展開した。しかし後に、ジャック・デリダによって、そのようなオースティンのコンテクスト概念は批判的に考察されることとなる。本研究は、そのオースティンに対するデリダの批判に特に注目するものである。それは、言語行為論が CA を支える最も重要な支柱のひとつであるという理由からだけではなく、それに対してデリダがおこなった批判的考察が、ドイツ語教育における母語話者信仰を相対化させる可能性を秘めていると思われるからである。発表ではまず、ドイツ語教育における母語話者信仰をめぐる言説がどのような解釈に基づいているか整理を試み、次にそれに対して検討を加えたい。

2) 言語についてのポートレート

学習者が語る言語学習歴

森田 昌美

外国語教育研究における新たな動きの一つとして、1990 年代以降、学習者ならびに教授者自身に研究の目が向けられるようになったことが挙げられる。この研究領域には学習者と教授者双方の過去の経験、とりわけ彼らの言語学習歴、教授歴、性格や興味、欲求、価値観といったさまざまな要素が複雑に関わってくる。それらの経験や知識、情緒的な要因が相互に作用し合い、教師ならびに学習者の内部には「主

観的な理論」と呼ばれるものが形成される。この理論が関わる領域は大別して次の三つになる。すなわち 1) 外国語に関して、2) 学習に関して、3) 教授ならびに授業に関しての理論である。

外国語教師が学習者の「主観的な理論」について考える場合、その考察は推測の域を出ないものが少なくない。できればもっと確かな手がかりを求めることが必要である。学習者の言語学習歴、その言語学習観を知るための有効な方法の一つとして、2003年度から本発表者は大阪外国語大学2年次クラスで「言語についてのポートレート」(Sprachenporträt)というプロジェクトを導入している。二人から三人の学生が毎週、3分前後のレポートを用意して、彼らの言語との出会いと今日までの歴史を振り返り、ドイツ語で語るのである。

本発表では、2003年度と2004年度の「言語についてのポートレート」を分析し、学生たちの言語学習歴の特徴を明らかにする。次に、ポートレートについて「語る」ことが外国語学習において占める位置、および学習者に対して及ぼす影響について考察する。終わりにこのポートレートをもとに、2005年度前期に実施した学生へのインタビュー調査について報告し、メタ認知レベルで学習者自身が解き明かそうとする彼らの言語学習歴、言語学習観について述べる。

3) Bier, Würstchen, Hitler?! - Methoden, Ergebnisse und Konsequenzen einer Studie zu den Deutschland- und Deutschenbildern japanischer Deutschlernender

Matthias Grünewald

Ein wesentliches Ziel des gegenwärtig stattfindenden Jahres „Deutschland in Japan 2005-2006“ ist die Aktualisierung und Differenzierung der Deutschland- und Deutschenbilder in Japan. Die Frage, wie die bei Deutschlernenden existierenden Vorstellungen und Meinungen strukturiert sind, stellt sich jedoch nicht nur im Rahmen dieser Großveranstaltung, sondern betrifft generell die landes- und kulturkundlichen Inhalte des Deutschunterrichts in Japan. Eine wichtige Voraussetzung für häufig geforderte inhaltliche Veränderungen ist aber eine genauere Kenntnis der existierenden Fremdbilder über Deutschland und die Deutschen von japanischen Deutschlernenden. Bisher wurden jedoch keine umfangreichen empirischen Untersuchungen über diese Frage vorgelegt.

Mit einer 2000 durchgeführten und 2005 veröffentlichten Longitudinalstudie zu den Deutschland- und Deutschenbildern von Deutschlernenden im ersten Studienjahr an einer ausgewählten Universität im Süden Japans wird zum ersten Mal eine methodisch abgesicherte Analyse dieser Fremdbilder vorgestellt. Durch die Anlage der Untersuchung ist es möglich, neben der Feststellung des allgemein existierenden Vorstellungen auch Aussagen über den Einfluss des durchgeführten Deutschunterrichts zu machen.

Ausgehend von den zentralen Ergebnissen sollen die wichtigsten Elemente des methodischen Vorgehens und die Verfahren der Qualitätssicherung der Untersuchung beschrieben werden. Darüber hinaus sind vor allem auch die konzeptionell-theoretischen, unterrichtspraktischen und hochschulpolitischen Konsequenzen von besonderem Interesse, die die Ergebnisse der Studie nahe legen.

ポスター発表 (10:00 ~ 13:00)

G 会場

ベンヤミンのエッセイ 青年の形而上学 における死の意味

ベンヤミンによるヘルダーリン・ヘリングラート受容を中心に

小野寺 賢一

ベンヤミンの青年期の論考 フリードリヒ・ヘルダーリンの二つの詩作品《詩人の勇氣》 - 《臆心》 は、ヘルダーリンのピンダロス翻訳について書かれた、ヘリングラートの博士論文をその理論的基盤の一つとしている。ヘリングラートが、古代ギリシャの文芸作品とヘルダーリンによるそのドイツ語翻訳および彼の後期詩作品の特性を、それらが共通してもつ韻律上の構成から分析するのに対して、ベンヤミンはこの分析に用いられる「接続」および「語の結構」の理論を、詩において形姿化される世界の構造分析に適用する。ベンヤミンのヘルダーリン受容に決定的な影響を与えたヘリングラートではあるが、両者の差異は、ヘルダーリンが『オイディプス』への注解』および『アンティゴネーへの注解』において用いた「釣り合い」の理論ともいうべきものの理解において明瞭にあらわれる。本来悲劇の筋立てにおける前半部と後半部との釣り合いを保つためのこの理論を詩の領域へともちこむ際に、ヘリングラートが詩の韻律的要素と物語的要素との釣り合いとして解釈しなおす一方で、ベンヤミンは本来の意味に即しつ

つ、この理論が、「詩人の死」を描き出す《臆心》の内実の構成においてはたらいっていることを示そうとする。本発表の目的は、以上のようなベンヤミンの分析を読解し、それをもとに同時期に書かれたエッセイ『青年の形而上学』において示される、特殊な死および時間の観念の意味を探ることにある。

シンポジウム (14:30 ~ 17:30)

A 会場

トーマス・マン『魔の山』の「内」と「外」 新たな解釈の試み
Neue Innen- und Außenansichten von Thomas Manns *Der Zauberberg*

司会：福元 圭太

1) 『魔の山』第7章後半をめぐって

友田 和秀

『魔の山』は、外見上はあくまで日常的かつ常識的な、つまりリアリズムの視点から物語られてゆく小説である。その姿勢はたとえば、雪山で道に迷った主人公ハンス・カストルプがおこなう「ぐるぐる回り」さえもが、「本に書いてあったとおりだ」と語られるほど徹底したものである。ところがたった一カ所だけ、その禁が破られる場面がある。第7章第8節「ひどくいかがわしいこと」における亡霊ヨーアヒムの出現である。複数の人間の目のまえに故人が姿をあらわすということは、常識的に考えてまずありえないことだろう。小説全体がリアリズムの視点から物語られているだけに、それだけいっそうこの場面の特異さはきわだったものとならざるをえない。マンはなぜ超常現象を導入してまで亡きヨーアヒムをハンス・カストルプの、そしてわれわれ読者の眼前に出現させねばならなかったのか。さらにそうまでして呼び出された亡霊ヨーアヒムは、小説全体にたいしていかなる意味を持っているのか。本発表は、『魔の山』の「内側」からこれらの問いに答えてゆこうとする試みである。

2) 「忘却と想起の物語」としての『魔の山』

小黑 康正

かつて人々は、レーテの水を飲むことで記憶を忘れ新たな肉体で再生する、と考えた。『魔の山』には、この川がいわば流れることで、「忘却と想起の物語」が成立する。物語は、「カストルプとポルックス」と命名される従兄弟同士の再会に始まり、戦場の「ふたり」の描写によって終わる。その核心部には、忘却の世界に身を委ねる「単純な若者」ハンスと、忘却を頑なに拒む「謹厳実直な」ヨーアヒムとの、相対し同時に相互に補完する関係が存在する。

シモニデスの逸話によれば、元来、想起の目的は死者の追悼にある。

『魔の山』前半では、忘却によって密封空間に封じ込められるハンスの姿と、死をめぐる従兄弟同士の行動（例えば、亡き二人の息子の記憶のみに生きる「ふたりとも」と呼ばれる婦人との出会い）が描かれる。後半では、パラレルな構成と表現内容の交差によって互いを補い合う「双子の章」の中で、ヨーアヒムの死、亡霊の呼び出し、ハンスの謝罪、そして最後の戦場の場面が展開する。こうして小説『魔の山』は、「忘却の人」が「想起の人」を追悼する物語として、前者の謝罪に「錬金術的高揚」という再生の秘蹟を託すのである。

なお本発表では、峻険な『魔の山』の「内」へと奥深く入り込むことが「外」からの新たな視角にも通じること、つまり、絶え間ない裾野の広がりこそ本作品の魅力があり、「魔法」が存すると考える。

3) 「祝福せられたる食物摂取を！」

『魔の山』における食の情景

柏木 貴久子

国際サナトリウム「ベルクホーフ」に滞在する人々は、規則的な療養生活を日々繰り返してはいるが、その病める身体にもかかわらず、提供される豪華な食事を旺盛な食欲で消化してゆく。一般社会から隔絶された高地に位置する、いわば身体のための施設において、必然的に注目される身体性は、食べるという行為を通して、象徴的形式的行動、儀礼的言動へとつながっていく。飽食の日々を過ごす主人公ハンス・カストルプ、彼が食卓へと向かう際に受けた挨拶のことばは「祝

福せられたる食物摂取を！」であった。合理的なものと非合理的なものとの対立せず、非合理が合理の中にとりこまれ、さらには宗教的なものと世俗的なものが共存しているこの言葉は、作品の飲食の情景全体を特徴づけるものである。マンの言に拠れば感覚的なものが冷静な様式で書かれているという『魔の山』において、この特徴は食に関する叙述にも色濃く反映されているといえよう。

本発表では、作品における飲食行為に注目し、それらを広義の儀礼的行動、文化的に形づけられた行為としてとらえることにより、作品中で担う機能を解釈しながら、そこからもたらされる意味の生成、文化形成について考えてみたい。複雑に絡まる「意味の網目」(C.Geertz)である文化を分析するのに、『魔の山』はきわめて多くを提供している。

4) 魔法の山の東へ

田村 和彦

ハンス・カストルプがハンブルクからスイス山中ダヴォスのサナトリウムを訪問する旅は、小説の終幕に置かれた第一次大戦の勃発から逆算して1907年の夏と推定できるが、それはちょうどドイツがイギリス・フランスに遅れじと植民地獲得と世界政策によって急速に帝国主義的な拡張を目指していた時期にあたる。ヴィルヘルム2世はイギリスの3C政策に対抗して、ベルリン=ビザンチン=バクダードを結ぶ鉄道を敷設し、中東の利権を争う東進政策(3B政策)を展開した。結核療養の患者たちが世界各地からスイスの山奥にあるサナトリウムにたどり着くのも、列強の植民地政策が張り巡らした交通網の恩恵によるものである。ダヴォスはいわば世界交通の交点であり、この高みから世界が俯瞰される。今回の発題は、『魔の山』という「ドイツ小説」を、あえてこの地理的構図、より具体的に言えば、第一次大戦をはさんだ時期のドイツの地政学的な布置のもとで読むことにある。特に注目したいのは、頻出する「東(オリエント/アジア)」に関する表象である。「教養小説」という枠組みをめぐる議論や、マンの自作解説を踏襲する密封的/hermetisch/作品内在的な詮索には抵抗し、この小説をできるかぎり「外部」に向けて開く読み方を提示したい。キーワードは「性、交通、植民地」である。

市民社会における暴力とジェンダー

Gewalt und Gender in der bürgerlichen Gesellschaft

司会：佐藤 文彦

言うまでもなくジェンダーをめぐるディスクールは、近代市民社会の秩序を維持するための強力な幻想装置として機能してきた。そのジェンダーを問い直すことは既存の秩序に揺さぶりをかけ、新たな知見をもたらす試みに他ならない。そういった作業は近年、歴史学や社会学の分野で大きな成果を上げた。しかしこの新しい知の地平をめぐる情勢にも、いまや硬直化の兆しが見え隠れしているのではないだろうか。今日、性をめぐる諸問題を扱うことは、ある意味でエスタブリッシュメント側の言説に身を置くことと成り果てた観がある。アカデミズムの場において「ジェンダー」が必須の参照項となり、大学の一般教養科目にジェンダー論が取り入れられるような状況下では、旧態依然とした価値観への揺り戻し（例えばインターネット上に見られる前時代的な男女観や古色蒼然たる露骨な性差別）がかえって権威への「反抗」の身ぶりとして若者にアピールすることさえ起こりうるのだ。

このような状況に対して文学（研究）は、いかなる一石を投じることができるのか。思い返せば文学はそれ自体すぐれて「暴力的な」営みである。古来より文学がさまざまな暴力を目に見える形で描き続けてきたのは勿論のこと、文学は目に見えない暴力性をも孕んでいる。文学というメディアが近代市民社会のジェンダーにまつわる固定的表象を拡大再生産し、既存の秩序を維持するための「暴力装置」として機能してきた事実を、およそ文学研究に携わる者は見落としてはならないだろう。他方、文学という先天的にすぐれてクリティカルな営みの持つ「暴力性」、市民社会を透徹したまなざしで破壊・解体していく「不穏さ」もまた、我々は否定しない。そもそも文学は実利的な学ではない。生産的な思考でもない。何かを破壊する思考であり、価値転倒の試みである。閉塞状況に陥った時代、旧来の価値を強引に維持・復古しようとする風潮が強まるとき、世界の別様の在り方を開示するものとして、文学はその存在理由を発揮するのだ。

本シンポジウムでは、文学の持つこういった二重の「暴力性」（不穏さ）を踏まえた上で、18世紀末から20世紀末までのヨーロッパ市民

社会におけるジェンダーと暴力をめぐる文学的表象を取り上げる。すなわち、成熟しつつある市民社会において性にまつわる規範がいまだ確立されていなかった時点から、それが徐々に強固なシステムとして編成され、やがて再び緩やかに解体へと向かう全プロセスを視野に含めることになる。文学作品に表れる性と暴力は、(可視的・不可視的を問わず)現実の暴力をどのように反映しているのか。また、それ自体「暴力的な」文学は、現実にもどのような亀裂を走らせようとしたのか。その検証を通じて、旧来の手法による文学研究からも「ジェンダー論」という名の知の枠組みからもこぼれ落ちていた、人間の生に固有のリアリティーが浮かび上がるだろう。

1) もう一つのジェンダー・イメージ

18世紀末の女性劇作家

菅 利恵

ドイツ語圏 18世紀後半の市民悲劇においては受動的に暴力の犠牲者となる女性達が多く描かれているが、その一方で、暴力的な女性登場人物も、決して珍しくはない。例えばレッシングは『ミス・サラ・サンプルソン』の中で、恋人にナイフを振り上げ邪魔者を容赦なく殺害するマーウッドを描いているし、初めて市民悲劇論を書いたことで知られるプファイルも、自作の『ルーシー・ウッドウィル』の中に、父親殺しに手を染める女主人公を登場させている。しかし、こうした男性作家たちによる「暴力をふるう女性」の姿は、道徳的な転落を戒める教訓のためのものであったり、あるいは市民的主体の他者恐怖を投影させた像であったりと、往々にしてステレオタイプに固定されたものであった。18世紀末になると、小説の分野ほどにめざましくはなかったものの、演劇の分野にも女性作家の進出が見られ、女性の手による市民劇、市民悲劇も登場した。そこでは、暴力と女性をめぐるイメージが、男性作家達とは異なる形で紡がれている。本発表は、日本ではまだ注目されていない18世紀末の女性劇作家たちに光を当てて、その作品において暴力、とりわけ女性のふるう暴力が、どのように描かれたのかを探るものである。

2) クライストの描く「武装した女性」たち

川島 隆

女性のみからなる好戦的な「アマゾン族」の神話的イメージは、伝統的なジェンダー概念を攪乱するものであると同時に、18世紀の啓蒙時代までは、いわば反面教師となることによって女性性のイデオロギーを固定化するための装置としての機能を保っていたとも言える。しかし18世紀末、フランス革命の動乱の中で、この像は新たなアクチュアリティーを帯びることになる。そこでは女性解放の気運が高まり、実際に武器を手にとって戦う女性の姿がクローズアップされたからである。この像は、現実にはまた男女を峻別するジェンダー秩序の再編が市民社会において急速に進むのと並行して、革命の理念を象徴するものとしてポジティブな地位を獲得するに至った。

19世紀のドイツにおいては、ある意味ではフランス革命が提示した新たな女性像への反動として、それに対抗する形で、男女の性差の「科学」言説化が急速に進行していく。だが19世紀初頭のドイツ文学において、「武装した女性」は、このイデオロギーを逸脱するような形象として表れてくる。本発表ではクライストの戯曲『ペンテジレーア』を取り上げ、そこで描かれた女性像の多様性・複数性に特に注目したい。クライストは、一面ではきわめて「マッチョ」的とも言える男女観の持ち主であったにもかかわらず、単一のステレオタイプには回収されない、複数の「武装した女性」たちを個性的に描き分けているのである。

3) セリーヌにおける女性像と「マッチョ」の問題

早川 文敏

『城から城』という小説でセリーヌは、16歳の少女の身体を人間としてというより動物として、あるいは物として貶めた見方をしている。少女の体の美しさを褒めるとき、物理的な美しさだけを抽出して褒めている。これは、女性から完全に人格を取り除いた上で価値評価を下すという、女性にとっては侮蔑的な視線と言えるのではないか。しかし女性の身体、特に脚の魅力について述べる表現を見ると、単純に肉体を物として見ているだけでないようだ。女性の肉体的な美にこだわ

るこうした態度は、幼かった頃の経験から生まれたものでもあり、また彼が医者であって人体をよく知っていることもこれに関係している。何人かのバレリーナと交際したセリーヌは、女性の身体の美しさに、本能に訴えるもの以上の要素を見るようになった。小説中の表現をよく見ると、女性の脚には特殊な価値が加えられているのがわかる。単なる肉体美を越えるものとして、セリーヌは脚から次の二つの美点、「詩」と「精神性」を発展させているのである。確かに女性の人格については言及せず、その肉体のみを称揚するセリーヌの態度には、女性蔑視的な性格が感じられるかもしれないが、女性でしか持ち得ない尊い価値もはっきりと認識していた。女性を描くとき外面的美を全面的に前に押し出してはいるが、それは単に女性を肉体的存在に貶めているというのとは違った考えに基づいているのである。

4) インゲボルク・バッハマンの暴力の記憶をめぐる言説

高井 絹子

バッハマンの『マリーナ』は作家の個人的な体験 マックス・フリッシュとの私的な関係とその破綻 を背景とし、フリッシュが『我が名はガンテンバイン』に書き込んだバッハマン像へのバッハマン側からの返礼であった。作家にとってこの作品は、自分が一度は敗者となった「存在をかけた男と女の戦い」の延長線上に位置する。作家は『マリーナ』第2章において、絶滅収容所のガス室のイメージまで援用し、「父」による「母」や「娘」への虐待を描く。ここで描かれる暴力は、「平和な世界にも常に存在するファシズム」などと歴史的過去と結びつけて普遍化しようとしなくとも、今日ならばそれだけで DV として社会的に問題提起できる類いのものであろう。

しかしながら、作家の関心は DV そのものを描くことより、DV を経験した者のその後を描くことにあったといえよう。作中の「わたくし」は封じていた記憶をマリーナに語り、語りつつ自分の陥っている状況を認識する。内的な対話を経て、壁のなかに消えてゆく「わたくし」の死は全人格的な死を意味してはいない。描かれたのは女性作家のなかの「女」の死であった。

書かれる側から書く側へ。自分はフェミニストではないとかつて語っていた作家は、『マリーナ』の最後で「女」の死を描き、遅ればせの

フェミニスト宣言をしたのではなかったろうか。

4) DDR 末期社会のなかの《小市民性》

クリストフ・ハインの初期作品を中心に

國重 裕

1946 年生まれのクリストフ・ハインのデビュー当時の作品には、DDR 時代末期の市井の人々に潜む小市民主義、そしてその小市民主義が孕みもつ暴力性が描かれている。彼らの多くは共産党政権の自由のない生活を嫌いながら、反抗することなく順応し、「どうせ何も変わらない / 変えられない」と、心地よい諦観のぬるま湯に浸かっていたのだ。そしてこの平穏な生活を脅かす異物を周到に排除していた。こうした市民たちの欺瞞的モラルを暴いたのが、ハインの文学である。『ホルンの最期』(1985)の登場人物の一人シュポデックは言う。「密告者、殺人者はどこからかやって来るのではない。彼らは我々の内にいる。この閑でのどかな片田舎の住人のあいだに。彼らは我々の家の軒下から、我々の皮膚の下から這い出てくるのだ。」

ハインは反体制作家と見做されることが多かったが、そうではない。むしろ「自分たちは被害者なのだ」と言い募って、積極的に抗議の声をあげることなく、心地よい諦念に耽り、結果、独裁政権を存続させた DDR 市民への挑発なのである。「自由は思いがけず終わってしまったり、不意にやんだりするものではない。自由はいつもミリメートル単位で死ぬのである。そして我々一人ひとりが、少なくとも一ミリ分の責任を負っているのだ。」

一見臆病な小市民が、自分に火の粉が降りかからないよう、異物に振るう暴力。この暴力をハインの初期の小説や戯曲を題材に分析する。同時に、ハイン文学に特徴的な、「男性社会」についてもメスが加えられる。

シンポジウム (14:30 ~ 17:30)

C 会場

ニューメディアに映じたドイツ語の最前線

Neue Entwicklungen des Deutschen in den Medien von heute

ゲーテンベルクによる活版印刷の発明以降最大の文明史的革命と喧伝されたインターネットの誕生と普及、それに代表されるハイパーメディアの進展と浸透にともなって、現代社会の言語生活は確実に変容を迫られている。その一方で、メディアテクノロジーの変転にもかかわらず、いわゆる「ニューメディア」における言語の書記性は揺らぐことなく、その多様に見える現象形態は単に構成要素の複合的組み合わせに起因するにすぎないと考えることもできよう。

現代社会におけるニューメディア、とりわけ電子メディアやデジタルコミュニケーションを主として統計学的手法で分析し、位置指定する試みは近年とみにメディア社会学、社会情報学などさまざまな立場からなされている。ゲルマニストとして、あるいは生活者としてそうしたニューメディアの恩恵に浴しているわれわれにしても、えてして日常性に埋没しつつメディアを手段として消費するにとどまり、反省的・理論的にメディア環境の内実をとらえなおす機会を得ることは稀であろう。また、言語現象とコミュニケーション様式の変容に焦点を当て、具体的コーパス（事例）に基づいて推進される研究は、ドイツ語を対象とするものに限ってみてもまだ初期段階にあるものと思われる。以上のような問題意識に基づき本シンポジウムでは、日独語・日独文化比較の視角も随時取り入れながら、いわゆる伝統的な「活字文化」の外もしくは周辺部に位置づけられるメディア（マンガ・コミック、携帯メール、チャット、電子掲示板、電子メール〔メーリングリスト〕）を綴るドイツ語がどのような具体相を示しているかを考究する。それぞれの報告では、「翻訳」「文字と図像」「テクノロジー」「協調のストラテジー」「メタ・コミュニケーション」「逸脱」「対照社会言語学」などをキーワードもしくは切り口としてそのスナップ写真を描き、報告後のディスカッションとあわせて、言語、記号、文化の伝統的境界を越境しつつあるドイツ語最前線の姿を照らし出すことをめざす。その過程で、言語研究の従来概念や方法がシンポジウムで対象化されるようなドイツ語の分析にとってどこまで有効かを問い直すとともに、話しことばと書きことばの相関関係や、言語記号と視覚的記号の関係、テクノロジーと言語の関わり、ひいては言語と社会（さらにその基底にある人間）の相互交流についての原理的・方法論的反省と討議・展望の機会を提供できることを願う。

1) マンガ・コミックのドイツ語

オノマトペの翻訳法をめぐって

細川 裕史

現在、ドイツでは日本製コミック（マンガ）がブームである。そのため、日本製コミックをドイツ語へ翻訳するという新たな作業が必要とされるようになってきた。文字テキストと図像テキストとの混合体であるコミック・テキストにおいては、つねに図像テキストとの関連を視野に入れながら文字テキストを翻訳する必要があり、とりわけ、コミックの中で多用されるオノマトペの翻訳は大きな困難を伴うとされる。本発表では、日本語オノマトペと比較しながらドイツ語オノマトペの特性を考察し、語彙レベルにおける翻訳の問題を指摘する。次に、実際に翻訳刊行されている日本製コミックのドイツ語訳を対象に、図像テキストと関連したオノマトペ翻訳の問題について考察する。その上で、ドイツ人を対象としたアンケート調査に基づいて、理想的なオノマトペ翻訳方法を探る。最後に、翻訳のため必要に迫られて行われる語彙の借用や造語など、言語の改変の過程にも論及する。

2) 携帯メールのドイツ語

日本語の事例も参照して

渡辺 学

携帯電話はそもそも若者をターゲットにして市場開発されたが、いまや現代人の必須アイテムとなった。その意味でも、携帯メールのドイツ語はドイツ語の最前線の一端を形作っていると思われる。本報告では、携帯電話のメール機能に焦点を当てて、現在進行形のドイツ語の一断面を素描する。テキストコーパスを分析すると、携帯メールのドイツ語には、音省略、省略語、文要素の省略、話しことば性など、話しことばの特性が色濃く映し出されている。注目すべきは、こうした言語的特徴に加えて、携帯電話というメディアにまつわるテクノロジーの変容によって、メール作成の仕方、スピードのみならず、ユーザーの携帯電話との関わり方にも変化があらわれつつあることである。今回は、エモティコンと呼ばれる顔文字や絵文字の存在・使用などをめぐって適宜日本語の事例とも照らし合わせながら、言語記号と視覚的記号の連動やせめぎ合いといった具体相を浮き彫りにし、あわせて、パソコンによる電子メールそのほかのコミュニケーション様式に現れ

たドイツ語ともつき合わせて、携帯メールのドイツ語の言語的特徴、およびそのコミュニケーション様式の特徴について考察する。また、そのほかのメディアにおけるドイツ語の諸相を把握する際に求められる視座や問題性にも言及したい。

3) チャットルームで交わされるドイツ語 文字を用いた協調のストラテジー

白井 宏美

チャットは、文字言語でありながら「即時性」と「双方向性」を有し、参加者たちが時間を共有できる（送信と受信が同時進行的に行われる）という点で、他のニューメディアと決定的に異なっている。チャットの参加者たちは、物理的には離れていながら心理的には場（仮想空間）を共有し、チャットを会話と同じような感覚でやり取りする。

実際にドイツ語チャットを観察してみると、対面コミュニケーションにおいて見られるジェスチャー、顔の表情、感情表出などのノンバーバルな特徴がエモティコン（顔文字・絵文字）や動詞語幹辞によって表され、また音声言語としてのプロソディーの特徴が大文字書きや文字の反復によって再現されている。これらは、メディアの制約を逆に活かしたものであると言える。チャット特有の現象と言えるものに、入退室のあいさつ儀式やハンドルネームによる自己演出などを挙げることができるが、きわめて興味深いのは、本来会話で使用されるはずの「あいづち」が、チャットでも協調のストラテジーとして有効に機能していることである。また、この参加者間の協調という観点でチャットを分析することによって、「隣接対(adjacency pair)」や「会話の順番取りシステム(turn-taking system)」などの会話分析の諸概念に新たな認識が得られる可能性がある。

4) 電子掲示板（BBS）に書き込まれるドイツ語 推敲された「逸脱」

高田 博行

一概に電子掲示板と言っても、そこで話題とされる対象によって言

語的特徴は一様ではない可能性があるが、本発表ではアメリカのロックバンド Green Day のファンたちが書き込む掲示板を資料にして考察を進めることとする。そこに書き込まれたことばを観察してみると、言語的手段としては、逸脱的書法、エモティコンなどの視覚的記号の多用、話しことば性、若者ことば・英語語法・方言などの語彙選択といった点で、携帯メールやチャットときわめて多くの特徴を共有している。他方で、例えば *mitdemfinger aufsmeffzeigundhinauslach* (大意: 「指差しゲラゲラ」)、*versinkt in selbstmitleid* (大意: 「自分に同情モード」) のように、拡張された動詞語幹辞を用いて、直前の自分自身の発言に対してメタ・コミュニケーション的コメントを加えているのが目立つ。また電子掲示板では、後続する書き込みの言語的スタイル(「逸脱」の程度)は、先行する(別人の)書き込みの言語的スタイルに合わせられていることが多いという傾向が見られる。これらの特徴は、チャットや携帯メールと比べて、電子掲示板ではゆっくり時間をかけてテキストについて推敲できることと関連していると思われる。

5) メーリングリストのドイツ語

ドイツにおける新たな表現形式について

山下 仁

携帯電話、チャット、あるいは電子掲示板などに比べるとメーリングリストで用いられるドイツ語には、エモティコンやその他の逸脱的書法は少ないように思われる。少なくとも、発表者らが所属しているメーリングリストでは、エモティコンは多用されていない。その意味では、メーリングリストのドイツ語に関しては従来の概念や方法によって解明できる部分が多いに違いない。しかし、メーリングリストの言語を取り扱う場合、発信者、受信者、伝達内容といったこれまでのコミュニケーションモデルでは不十分であるという指摘がなされている。また、発信者と受信者、そして潜在的な受信者が異なる文化に属する場合、どの文化の表現形式が「正しい」のか、もしくは「ふさわしい」とされるのかという問題も浮上する。そこで、本発表では、メーリングリストにおける新たなドイツ語の表現形式を取り扱う方法論上の問題点を指摘し、いくつかの具体例をもとに対照社会言語学の観

点から「関係面」に関する「呼称表現」や「結語」に用いられる表現形式の分析を試みる。

口頭発表：文学（14:30～16:30）

D会場

司会：三ツ木 道夫・金子 孝吉

1) ホーフマンスタールと日本

ラフカディオ・ハーンの影響

関根 裕子

ホーフマンスタールと日本の関係は思いのほか深い。貞奴のウィーン公演(1902)を見て、心と体が一体の日本人の身振りに興味を示し、『エレクトラ』の日本初演(1913)をめぐる、松居松葉や森鷗外と書簡を交わしている。

しかしホーフマンスタールの日本観にとりわけ大きな影響を与えたのはラフカディオ・ハーンである。ホーフマンスタールはハーンの紹介する「日本」の中に、ヨーロッパの合理精神の危機を克服するヒントを求めようとした。その一例が、断片『若きヨーロッパ人と日本人貴族との対話』(1902)である。ハーンの『ある保守主義者』の主人公のモデルとなった日本人との、この架空の対話からは、ヨーロッパの個人主義に対する批判とともに、日本の精神文化によるヨーロッパ文化救済の希望が読み取れる。ハーンの訃報に接した際の追悼文(1904)では、その著作を「幸福の使者」と讃え、とりわけ『前世の観念』や『ある保守主義者』が収められた『こころ』を絶賛している。

第一次大戦頃から顕著になるホーフマンスタールの保守的な発言の中にも、仏教の「業」や「因果」を独自の解釈で紹介したハーンの影響が見られる。『アド・メ・イプスム』にも「超自我」や「世代の鎖」など、ハーンの『前世の観念』からの影響と思われる言葉が目立つ。ホーフマンスタールはこの中で、魂を個人的なものではなく前世からの無数の総体として捉え、仏教思想の「業」や「因果」を「運命」と読み換え、独自の「プレ・エクシステンツ」思想を展開した。この考え方の作品上の実践が『影のない女』であるといえよう。

本発表では、ホーフマンスタールの蔵書中の書き込みなども紹介しながら、彼の思想や作品にハーンが紹介した「日本」が与えた影響を

検証する。

2) 切り裂かれた眼 ルイス・ブニュエルの『アンダルシアの犬』 とパウル・ツェラーンの『ことばの格子』における「切り裂かれた眼」 についての一考察

三ツ石 祐子

シュールレアリスム映画の代表作の一つである『アンダルシアの犬』(Un chien Andalou)はルイス・ブニュエル(1900 - 1983)とサルバドール・ダリ(1904 - 1989)によって1928年に製作された。この映画は、ブニュエルとダリの2人がそれぞれに見た夢を語り合ったのが契機となり、そのシナリオは「合理的、心理的ないし文化的な説明を成り立たせるような発想もイメージも、いっさい、うけいれぬこと。非合理的なるものに向けて、あらゆる戸口を開け放つこと。われわれに衝撃を与えるイメージをうけいれ、その理由について、穿鑿しないこと」*という、一種の自動記述的方法で書かれた。

このように構成されたこの映画の冒頭には、ブニュエルの夢が基になった、剃刀の刃が眼を切り裂いていくシークエンスがある。このシークエンスを、これまでの解釈は、概ねブニュエルの「夢の一場面」、「超現実的イメージの始まり」としているが、銀幕に投影された世界の否定、つまり、現象として知覚された「超現実」に対する警告として捉え直せるのではないか。

この「切り裂かれた眼」のイメージはパウル・ツェラーン(1920 - 1970)の、『ことばの格子』(Sprachgitter)という詩にもまた見ることができる。この詩の眼は剃刀によって切り裂かれてはいないが、「ことば」という格子が眼に被さることによって、切片化されている。ツェラーンにとって「眼」というモチーフがいかに重要であったかということは、「眼」(Aug(e))と、この語の複合語 Augenkind、Augenstern、Schieferäugige など の出現頻度の高さからも窺うことができる。*しかし、ツェラーンにおける「眼」は、「ことば」との意味的類似性が強く、何かを視るという行為そのものは営まれていない。ツェラーンの「眼」は「ことばによってつくられた眼」であり、この詩『ことばの格子』では最初から「格子」に被われることで、「眼」と同時に「ことば」も切片化されている。なぜことばは切片化されてなお、「眼」をつくるの

であろうか。このことは、この詩『ことばの格子』が収録されている、1959年に出版された詩集のタイトルが同題の『ことばの格子』であることから、ツェラーンの詩作において重要な意味をもつイメージの一つとして考えられる。

ブニュエルとツェラーンの「切り裂かれた眼」を比較すると、それぞれの性質は異なるものの、イメージの重なりが認められる。本発表では、『アンダルシアの犬』におけるブニュエルの「切り裂かれた眼」とツェラーンの『ことばの格子』における「切り裂かれた眼」を、なぜ眼が切り裂かれなければならないのか、なぜ眼が不在(盲目、あるいは抉り出された眼)ではいけないのかという問いを手がかりに、両者のイメージが近似する必然性を考察する。その際、このイメージをツェラーンの詩論でもある、1960年のビュヒナー賞受賞講演『子午線』の中で言及されている芸術観、すなわち「詩の対話性」を要求し、「...イズム」に対して否定的な芸術観に照らしつつ、それぞれの「切り裂かれた眼」がその状態でしか視えないもの、また切り裂かれたが故に視なければならないものは何かを検証する。

* : ルイス・ブニュエル著(矢島 翠訳) : 映画、わが自由の幻想 ; 早川書房 1984年 ; S. 177

** : vgl. Peter Horst Neumann: Wort-Konkordanz zur Lyrik Paul Celans bis 1967;

München 1969

3) 地球を孕ませる新しい精神貴族

ムージルの『特性のない男』より

横道 誠

高度産業文明の整備拡充、資本主義の全能化、フェルキッシュな諸思想の跳梁跋扈、教養主義的社会制度の衰滅、テクノクラシーの脅威などをめぐって、旧来の伝統的知識人層と新興の異質の知識人層が睨みあった1870年代から1930年代という時代、その時を生きたムージル(1880 - 1942)は、彼の固有の一面として有していた原理主義的志向にふさわしく、『特性のない男』(1930/33)のなかに、たとえば地球を孕ませる といった壮麗とも誇大とも言える宇宙論的な形象と思様方式をもちこみ、現れるべき「新しい人間」の使命を予示しようと試みた。地球を孕ませる というこの文学的イメージは、同作品の中

で、「世界」とは「人間らしき何か」を溶かし込んだ「培養液」だと見なされる、つまり秘儀的子宮の一種、あるいは宇宙卵であると位置づけられるのに対応し、神話論の観点からもセクシュアリティ論の観点からも興味深いのだが、今回の発表で注目するのは、ムージルが「新しい人間」の出現を 地球を孕ませる という原理主義的な説明がらみで話題に乗せるとき、実はそれはすぐにまったく逆の非原理主義的な要素と結託、翻転してしまい、人文学の立場にある者からみて必ずしも首肯し得ないムージル自身のエリート類型観へと、いささか短絡的に接合されてしまうという点である。ムージルは当時の多くの知識人と同様、現実政治に距離を置き、「精神」の純粹性を賛美したのであったが、彼が熱っぽく語るその「精神」概念それ自体がムージルの浴していた時代の政治動向や社会層に関わる問題系と切り離すことのできない関係を取り結んでいた。この点を念頭に置きつつ幾ばくかの考察を試みたい。

4) Ein deutscher Schnüffler. Jakob Arjounis hart gesottener Privatdetektiv Kemal Kayankaya und seine amerikanischen Vorbilder

Stefan Buchenberger

Der deutsche Krimiautor Jakob Arjouni hat mit seinem Romanhelden Kemal Kayankaya einen Detektiv geschaffen, dem allenthalben eine enge Verwandtschaft mit US-amerikanischen Vorbildern wie Raymond Chandlers Phillip Marlowe oder Dashiell Hammetts Sam Spade nachgesagt wird.

Arjounis Erfolg, sein Romanerstling *Happy Birthday Türke* wurde mittlerweile sogar von Doris Dörrie verfilmt, beruht aber nicht nur auf dem bloßen Kopieren dieser genrebegründenden Figuren, sondern auch auf seinem spezifischen Umgang mit den klassischen Mustern und Motiven dieser Kategorie des Kriminalromans.

Anhand eines Vergleichs von Arjounis Werken, hierbei in erster Linie sein Erstlingswerk, mit den Romanen Chandlers und deren amerikanischer Weiterentwicklung durch Robert B. Parker und

seinem Detektiv Spenser, soll untersucht werden, was Arjouni aus der klassischen Figur des hart gesottenen Schnüfflers und den von Chandler und Hammet etablierten Motiven dieses Genres, wie z.B. der femme fatale, Gewalt, Großstadt und Anderen macht.

Ich möchte anhand von Ähnlichkeiten und Unterschieden der jeweiligen Figuren, ihrer Milieus und der Stilistik ihrer Autoren zeigen, dass Arjouni mit Kayankaya nicht nur eine Kopie seiner berühmten Vorbilder geschaffen hat, sondern es ihm gelungen ist, ein typisch amerikanisches Genre nach Deutschland zu verpflanzen und unter Verwendung seiner typischen Merkmale etwas Eigenes zu schaffen. Damit setzt er auch die Entwicklung dieser speziellen Art des Kriminalromans fort, die, in den 30er und 40er Jahren begründet, sich bis heute als eines der zentralen Genres der Krimiszene behauptet hat.

ポスター発表 (13:30 ~ 16:30)

G 会場

<ニューイヤー・コンサート>とマス・メディア
クラウスの未発売放送用アーカイブ録音とその考察

クレメンス・

佐藤 英

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が毎年元旦に行っている「ニューイヤー・コンサート」の起源は1939年大晦日にクレメンス・クラウスが指揮したヨハン・シュトラウスの作品による「アカデミー・コンサート」にあるが、これが文字どおり元旦のコンサートとなったのは1941年以降のことである。1945年まで彼が指揮した「ニューイヤー・コンサート」の草創期には放送用に録音が制作され、幸い幾つかの録音盤/録音テープが現存しているが、1945年の録音を除けばこれまで一度もレコード化されておらず、その存在はほとんど知られていない。昨年私は、ドイツ放送資料館Deutsches Rundfunkarchivに保管されている未発売の放送用録音を調査し、これまで不明な点が多かった第二次大戦中の「ニューイヤー・コンサート」の実状の一端を明らかにすることができた。本発表はその音源の試聴を交えた調査報告で、比較的まとまった量の録音が残されている1941年のコンサートの分析から、今日

の「ニューイヤール・コンサート」を特徴づけている実演コンサートとマス・メディアの密接な関係が、その草創期にも認められることを指摘することから話を始める予定である。

この話題提供は、ともするとディレクタントの趣味領域に属するものとされがちな録音資料を、文化史の考察に積極的に活用してゆく方策を探ろうとする問題意識に支えられている。この問題意識を共有した上で、議論を展開したいと考えている。

第 2 日 10 月 10 日 (月)

シンポジウム (10:00 ~ 13:00)

A 会場

ドイツ文学と美術

Deutsche Literatur und bildende Kunst

司会：西村 雅樹

文学を研究するにあたって、他の諸芸術と関わらせて探求するのは有意義だと言えるであろう。文学をそれのみで扱っていたのでは明らかにしがたい事柄が、他の芸術との関わりを通して明確になる場合もありうるからである。文学と関わる芸術上の主なジャンルとしては、音楽と美術が挙げられる。このうちドイツ文学と音楽というテーマについては、本学会のシンポジウムで近年においても一度ならず取り上げられた。それに対しドイツ文学と美術の関係は、シンポジウムのテーマとして取り上げられることがこれまでほとんどなかったように見受けられる。当シンポジウムでは、従来あまり注目されなかったこの「ドイツ文学と美術」というテーマを選び取ることにした。ただしこのテーマの下でよく論じられる作家や作品を扱うというよりも、発表者それぞれが専門とし関心を寄せる文学者や時代に新たな光をあてることに重きを置く。その際発表者が取る研究方法は一様ではない。むしろ互いに異なる方向性の提示によって、このテーマの持つ広がりや豊かさを示すことにする。さらに発表後それらを総合した議論を通して、相互に通底するものを浮かび上がらせてみたい。

1) 絵の中の言葉 リヒテンベルクとホガース

濱中 春

18世紀のイギリスの画家ウィリアム・ホガースの絵の中には、多くの言葉が描きこまれており、リヒテンベルクは、その『ホガース銅版画詳解』(1794-99)において、それらの言葉にほぼかならず言及している。絵の中の言葉は言語表現であると同時に、絵の一部を構成してもいる。つまり、それらは言語メディアと絵画メディアとの両方に属しており、それによって言葉とイメージ、そして両者の関係についての省察をうながす。本発表では、リヒテンベルクがホガースの絵の中の言葉を契機として形成したテキストを通して、言葉とイメージの相互関係を考察する。絵の中の言葉が描かれた人物や場面についての説明や情報を与えるのであれば、それはホガースの絵とそれにたいする解説であるリヒテンベルクのテキストとの関係に対応していることになる。しかし、この発表においてとりあげるのは、リヒテンベルクがホガースの絵の中の言葉を直接、絵と関連づけるのではなく、それらの英語からドイツ語への翻訳、音やつづり、文字の形、語源などに注目することによって、新たな言葉を増殖させているテキストである。絵から逸脱するように見えながら最終的には絵との関連に収斂してゆくそれらのテキストにおいて、言葉とイメージの差異と類似が交錯するさまを明らかにしたい。

2) 小説の中の絵 ゲーテからケラーまで

松村 朋彦

言語メディアと絵画メディア、言葉とイメージの相互関係という前の発表の問題設定を受けつぎながら、本発表では「絵の中の言葉」というテーマを反転させて、「小説の中の絵」というモチーフを取り上げる。レッシングの『ラオコーン』(1766)における、言語芸術と造形芸術、時間芸術と空間芸術の分離にもかかわらず、いやむしろそれゆえにこそ、ゲーテ時代から19世紀にかけてのドイツ語圏の小説には、絵画のモチーフがしばしば登場する。それは、言語とは異なるメディアを介して作品の中に新たな表現の次元を切り開こうとする試みで

あると同時に、言語芸術としての小説というジャンルの自己反省の役割をも果たしている。ゲーテの『親和力』(1809)、ホフマンの『悪魔の霊液』(1815-16)、メーリケの『画家ノルテン』(1832)、ケラーの『緑のハインリヒ』(1855/80)などの作品にあらわれる絵画と画家のモチーフを、文字とイメージ、書くことと描くこと、絵と額縁、肖像とモデル、具象と抽象といったテーマにそくして考察することによって、小説と絵画との相互関係を文学の自己理解の問題としてとらえなおしてみたい。

3) ヘルマン・パールと「ウィーン分離派」

西村 雅樹

本発表では、19世紀末から20世紀初頭にかけて美術界と深く関わったある文学者の美術批評を通して、その文学者の問題意識のありようを探ることにする。取り上げる文学者は、ヘルマン・パールである。世紀末ウィーンにおける新しい傾向の文学活動の推進者であったパールは、美術に関しても、保守的な画壇から離反して結成された「分離派」の支持者として重要な役割をはたした。彼は、美術と文学を総合した誌面づくりがめざされた機関誌『ヴェル・サクルム』にも関与し、この派の結成数年後には、『分離派』と題する批評集も刊行している。「日本美術特集展」への批評をはじめこの批評集に見られるのは、世界の諸現象とその根本をなすものとの関係への強い関心である。グスタフ・クリムトの『ピアノを弾くシューベルト』についての批評では、この関心は絶対的平安の境地の表現を見て取る問題として述べられている。本発表ではこのようなパールの問題意識に加え、クリムトに関する後年の評論に見られる、「場」や「関係性」を重視する思想傾向にも言及する予定である。

4) ローベルト・ムージルと新即物主義の絵画

水藤 龍彦

従来ムージルと造形芸術といったテーマは研究対象として取り上げられてはこなかった。しかし『特性のない男』のテクストに基づいた制作を行なった画家も90年代に現れている。「愛の完成」の冒頭に見ら

れる通り、絵画的表現ともいえる叙述をムージルの作品に見出すのは意外なことではない。また、「魔術的リアリズム」という別名をも有する新即物主義の絵画とムージルの作品のあいだには、単なる同時代性以上に共通する傾向が感じ取れる。きびしい批判精神から神秘主義にまで揺れ動く『特性のない男』のスペクトルと、これまた多様な傾向を含む新即物主義のそれとは、奇妙な符合を示している。両者を比較することから、20年代の深層への新たな視角を見出すことができるのではないか。具体的には新即物主義を代表する画家であるオットー・ディックスの諸作品とムージル、とりわけ『特性のない男』を比較しながら考察をすすめることになる。そのさいに、媒介項として、「写真」あるいは「写真的知覚」が重要な役割を果たすことになると考えられる。

5) トーマス・マンとカリカチュア

千田 まや

トーマス・マンは、兄ハインリヒや息子クラウス、娘エーリカとともにカリカチュアの格好の題材となってきたが、デビュー当時は諷刺雑誌「ジンプリツィシムス」を取り巻く文化人の一人として、兄とともにカリカチュアの絵本を作り、市民社会を諷刺する小品を書いていた。発表では、従来マン研究ではあまり取り上げられてこなかった、「ジンプリツィシムス」の赤いブルドックの画家トーマス・テオドル・ハイネとマンの関係を中心に扱う。この二人は、諷刺色の濃い『ヴェルズンゲンの血』の作者と挿絵画家の間柄であり、諷刺する側とされる側の間柄であり、ともにドイツを追われた亡命者であり、多くの共通の知人を持つなど、1896年から半世紀にわたってその軌跡が交錯している。また、この間、体制と折り合いをつけながら諷刺雑誌として存続し続けた「ジンプリツィシムス」と、それに対抗して作られ、ハイネ関わったパロディ版にも触れる。マンとハイネと「ジンプリツィシムス」、この三者の関係から生み出された作品や、数々のカリカチュアに、モデルが諷刺画の中で戯画化され、それが別の諷刺画に受け継がれていくプロセスを見ることが出来る。モデルが諷刺画に取り込まれる際に行われる諷刺画独特のデフォルメや、ある諷刺画のモチーフが他の諷刺画に転用される様を検証し、諷刺画の政治性と記号性

という特質、そして、それらとマンの創作技法との関連について考察する。

シンポジウム (10:00 ~ 13:00)

C 会場

演劇のパラダイム転換と新しいタイプの戯曲テキスト

Der Paradigmenwechsel des Theaters und Dramentexte neuen Typs

司会：谷川 道子

コメンテーター：栗山民也（新国立劇場監督）

2005 年は「日本におけるドイツ年」で、演劇の分野でも、ドイツ本国から今が旬の舞台が相次いで来日し、ヨッシ・ヴィーラーやニーハウスといった演出家が『四ツ谷怪談』や三島由紀夫の『近代能楽集』を日本の俳優で演出し、またドイツ文化センターの後援でドイツ現代戯曲 30 作品が順次翻訳刊行される、等々 ドイツ演劇に関わる者にとっては願ってもないこの好機に連動せずばなるまいという思いで、本シンポジウムは企画された。

「68 年」以降というかどうかはさておいて、現代演劇はその概念と様相において根底的な位相の変化を見せている。オフシーンのみならずメインストリームにおいても、70 年代の「演出家の演劇」を経て、80 年代にはレーマン用語を借りれば「ポストドラマ演劇」というタームで総称されるような脱ドラマ化の様相を呈し、演劇がまた新しいパラダイム・チェンジのときを迎えていることは確かだろう。演出あるいはパフォーマンス・テキスト・レベルの変化とともに、ポッシュマンのいう「ドラマ的でなくなったドラマテキスト」など戯曲テキストのレベルでも、ひいては研究レベルでも、その変容は著しい。

今回の「ドイツ現代戯曲選 30」の叢書は 70 年代以降の、しかも 90 年代以降の作品が三分の二を占めているが、それらはこの変容が戯曲の価値の低下というより、その概念とありようが多様変わったことの表れであることを、浮かび上がらせていよう。つまりは上演の場での「テキスト」の位置と意味が、あらためて問い直されているのだということを示しているとも言える。

現代の舞台では、戯曲テキストは演出や上演に対して如何なる位置

を占めるのか、もはやかつてほど決定的なものではなくなったのか。ハイナー・ミュラーがドイツ語圏のみならず、世界的規模で戯曲テキストのあり方を変えたと言われるが、しかしその一方で、演劇実践の現場ではたくさんの新しい戯曲テキストが書かれ、発表され、上演され続けている。それは、演劇の場におけるテキストの役割の変化や、さらには演劇のパラダイムそのものの変化とどう関わっているのだろうか。たとえば昨年ノーベル文学賞を受賞したエルフリーデ・イエリネクの作品は、作者自身が認めているように、そのまま上演することがきわめて困難であるにもかかわらず、演劇的イメージの喚起力においては傑出している点が、多くの演劇賞を総なめしている理由でもあるのだろう。テキストだけでなく、身体表現や多様な技術的手段も積極に取り込んでいる今日の演劇実践の現場では、しかし実際にはどのようなタイプの戯曲が受け入れられているのか。もし「新しいタイプの戯曲」という言い方が可能だとすれば、それは現代の演劇実践において、どのような位相での役割を果たしているのか。それらが舞台化の作業にとってもつ意味は、従来の戯曲テキストのそれとは異なるのか。これらの新しいタイプの戯曲テキストを受け入れる現在の演劇は、どのような課題と取り組んでいるのか。さらには、文学研究は現代の演劇実践にどのように寄与できるのか。それは演劇研究の地平とどう切り結び得るのか、等々。

そういった変化の位相とそれへの問いかけを、日本における演劇実践の場の問題ともクロスさせたいと、ドイツ演劇の現在にも通暁しておられる新国立劇場監督の栗山民也氏をコメンテーターに迎え、4人のパネリストと1人のコメンテーターでそれぞれの視角から問題を多様に照らし合いだしながら、戯曲テキストと演劇実践と研究の新たな関連を探るべく、問題提起と討議を行いたいと思う。

1) 戯曲テキストを研究すること

中島 裕昭

いまや演劇というジャンル自体が明示的な外延を失いつつあると言えるだろう。現在の演劇について理解するためには、戯曲テキストを読むだけでなく、造形芸術についての知識やメディア論、身体論、技術論が参照されねばならない。その一方で、最近では日本でも翻訳劇

を中心に、戯曲テキストの分析や関連資料の整理、上演台本の管理などの作業を担うドラマトルクの仕事が注目されている。いわゆる「リーディング公演」も増えている。戯曲テキストを読解するということの重要性が、演劇実践の場で再確認されていると言えるかも知れない。「ポストドラマ演劇」の時代に戯曲テキストはどのような役割を果たすのか。その戯曲テキストの分析を行う文学研究は、どのような方法で演劇に貢献できるのか。

文学的なテキスト研究と今日の演劇が持っている特性を踏まえ、演劇の実践と研究に貢献しうる文学研究の可能性について、理論的に整理してみたい。

2) 演劇と音楽の間 マルターラー演劇の合唱について

平田 栄一朗

戦後のドイツ演劇において合唱のモチーフは演劇の周辺に属していた。個々の戯曲や上演で合唱が取り入れられた事例はあるが、合唱を演劇の重要な戦略として実践し続けた演劇人はほとんど見当たらない。この状況を一変させたのが、1990年代から現在にいたるまでドイツ演劇界で躍進し続けるクリストフ・マルターラーである。少年時代に音楽の素養を積んだ後にジャック・ルコック演劇学校で身体表現のメソッドを学んだマルターラーは、音楽と演劇双方に知悉する演出家であり、演劇上演に合唱や楽器演奏を積極的に取り入れ、オペラやオペレッタのような既存のジャンルに定義づけられない、演劇と音楽との独自の融合を試みている。

マルターラー独自の試みがかつとも顕著に現れた上演が、1993年に初演された『ヨーロッパ人をやっつける！ 愛国の夕べ』である。この上演では11人の俳優たちが愛国的なリートを次々と斉唱するが、彼らはそれらの歌詞に感化され、他人に嫌がらせをしたり、反対に異常な同胞意識を示す演技を行う。この演技にはブレヒトが批判した感情移入の問題が提示されており、この提示によって合唱という音楽的な側面が演劇の手法によって異化される。このような音楽と演劇との融合と角逐をめぐるマルターラーの手法をつまびらかにしたい。

3) ドイツ現代演劇に対するオーストリア的(?)視点

寺尾 格

「ドイツ」現代演劇を作品面から支える「戯曲」という発想は、その文学性偏重のニュアンスの故か、最近はどうも旗色が悪い。しかしロゴス中心主義とは異なった可能性を求めて、演劇テキストは、これまでも様々な試みを行ってきたし、現に行いつつある。そのような観点に立つと、1990年代以降のオーストリアは、とりわけ作品面において特異な生産性を示しており、事実、進行中の30本の翻訳ラインナップにおいても、オーストリアの作家が8本を占めている。ドイツとは異なったオーストリア的「伝統」と言えば、ウィーン民衆劇や、世紀末のウィーン・モデルネがすぐに念頭に浮かぶ。そのような「過去」の蓄積から来る独特の演劇環境（例えばブルク劇場）が、現代と切り結ぶことで生じる火花が、ドイツ語圏の現代演劇の可能性とリンクしていると言えるだろう。1970年代以降のハントケ、トゥリーニ、ベルンハルトから、1990年代のシュヴァープ、イエリネク、そして9.11以後の「今」現在を描くカトリン・レグラに至るまでを見据えながら、ドイツとは異なった土壌から生じたオーストリア作家たちによる演劇テキストの示す言語感覚を、「演劇テキストの身体性」として捉え直してみたい。

4) 「演出家の演劇」の今日における姿

新野 守広

60年代後半、あらゆる芸術ジャンルでの実験精神の高まりを受けて、言葉よりも非言語的な形象の力で演劇を問い直す機運が高まった。一方70年代の西ドイツ、ベルリン・シャウビューネの演出家ペーター・シュタインは、むしろ戯曲に重点をおいて演劇をとらえ直す舞台を目指した。『ポストドラマ演劇』の著者レーマンによれば、西ドイツ演劇が政治的言説と劇文学から解放されるのは、80年代に入ってからのことになる。以後、もはや戯曲に奉仕せず、政治的な主張もしない演劇が趨勢となる。

1989年のベルリンの壁崩壊を契機に西と東の文脈が入り交じった90年代のベルリン演劇は、このような演劇史理解を混乱させた。たと

例えば 1992 年からフォルクスビューネの芸術総監督を務めるフランク・カストルフの舞台は、70 年代の「演出家の演劇」の過剰な反復であり、戯曲を読み替える作業を前景化して政治的な主張と資本主義批判のメッセージを込める。このようなカストルフの登場で演出家主導の演劇が極端に強調されたため、カストルフ以後の演劇人の戯曲に対する態度は二極化している。1999 年冬にメンバーを一新し、演出家オスターマイアー、劇作家マイエンブルク、ファルク・リヒターらを中心に活動している新しいシャウビューネは、戯曲の世界を丁寧に読み込む極になっている。他方、マルターラー、タールハイマー、シュリンゲンズィーフ、ポレシュといった演出家たちはそれぞれのやり方で戯曲と舞台の関係をとらえ直し、演劇の新しい方向を探っている。これらの演出家たちの活動を概観し、戯曲が舞台化の作業にとってもつ意味の変化を探る。

口頭発表：文化・社会（10:00～12:30）

D 会場

司会：斎藤 治之・奥田 敏広

1) メディア論としてのグラフィックデザイン

ヤン・チヒョルトと「ニュー・タイポグラフィ」

大村 幸太

本発表では、1920 年代のドイツを中心に展開された構成主義的・機能主義的な印刷物デザインの運動、「ニュー・タイポグラフィ」（Neue Typographie）の理論が、応用美術の一分野の方法論であるに留まらず、印刷物のデザインという視点からのコミュニケーション理論でありメディア美学であること、そして、1920 年代ドイツのメディア論的ディスカールの一端をなすものであることを明らかにしたい。

この運動を代表するデザイナーであり論客であったヤン・チヒョルト（Jan Tschichold, 1902–1974）は、その著書、特に『エレメンタル・タイポグラフィ』（„elementale typographie“, 1925）と『ニュー・タイポグラフィ』（„Die Neue Typographie“, 1928）において、「ニュー・タイポグラフィ」を理論化している。印刷物を視覚メディアとして明確に規定し、メディアとしての合目的性に印刷物の美を見出すその理論は、印刷物のデザインという視点に立ったコミュニケーシ

ョン理論であり、メディア美学であると言える。そして、「ニュー・タイポグラフィ」のデザインを「時代の精神の表れ」として、当時出現した新たな都市体験、大衆文化の可能性といったモチーフに結び付けて語るチヒョルトに、「ニュー・タイポグラフィ」をめぐる議論が、ヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin, 1892-1940）の論考をはじめとする当時のメディア論的ディスコースの一端をなすものであることを確認できるだろう。

2) 魂たちの宇宙 シュレーバーの『回想録』におけるカール・デュ・プレルの影響について

熊谷 哲哉

ダニエル・パウル・シュレーバー（1842～1911）の『ある神経病者の回想録』（1903）については、精神分析の領域で、これまで多くの研究がなされてきた。しかしながら、その独自の宇宙観が成立した背景やその同時代的な意味についてはあまり言及されることはない。

『回想録』に描かれた宇宙は、世界が滅亡し、神が暴走をつづけ、死者の魂たちが光線として飛来する、悪夢的反世界である。そこでシュレーバーは神によって身体を傷つけられ、女性化され、新たな人類を創造する責務を負う。シュレーバー本人が学術論文を意識して書き記したという世界観は、いかなる知識を背景として作り出されたのだろうか。シュレーバーは自らの著作に影響を与えた思想家としてカール・デュ・プレル（1839～1899）について何度か言及している。

デュ・プレルは、ダーウィニズムの影響の下に書かれた『宇宙の発達史』において、宇宙の歴史と居住世界の複数性を論じ、のちの『心靈主義』や『神秘哲学』では、心靈主義者として催眠術や交霊術によって死者の魂との接触を試みている。デュ・プレルにとって、宇宙人の住む世界は、死者の世界と同様、通常の人間の感覚が及ばない領域として捉えられていたのだ。

本発表では、デュ・プレルの思想とシュレーバーの宇宙観の親和性を中心に、『回想録』における神の問題および身体的女性化と異世界における新たな人類の誕生といった問題について考察する。

3) シューベルト『冬の旅』における『おやすみ』

田島 昭洋

ヴィルヘルム・ミュラー（1794-1827）の詩にフランツ・シューベルト（1797-1828）が作曲した 24 篇から成る連作歌曲集『冬の旅』*Winterreise*（1827 年作曲）の第 1 曲『おやすみ』*Gute Nacht*を取り上げ、詩と音楽の結びつきの一例を考えたい。

『冬の旅』は、24 篇に渡り、希望を失った孤独な「私 ich」があてもなくさすらう中で、さまざまな感情が錯綜する心のさまよいが描かれる。旅の途中で、ある娘と恋仲になり、さすらいが終わるかにみえた「私」に、再び、しかも冬の季節にさすらう動機を与えたのは失恋である。第 1 曲のタイトルでもある「おやすみ」は、「私」が夜中にひそかに別れの挨拶として書き残す旅立ちの言葉であるが、そこには、恨みや悔しさを辛うじて封じ込め、自制心を示すと同時に、未練を断ち切りがたい思いも詰まっている。『冬の旅』の内的モメントを形成する孤独感、絶望、悔しさ、夢想、諦念は、『おやすみ』の全 4 詩節に凝縮した形で現れており、『おやすみ』は 24 篇を開始するとともに、連関から切り離されてそれ自体で完結しているかのようである。

そのような『おやすみ』をシューベルトは音楽的にいかに解釈し、詩の内包するものをいかに引き出したか。『冬の旅』は外的なストーリーよりは内面の推移によって展開していくが、核心をなす孤独感・絶望などの内的モメントを表す詩語に音楽がどのように対応しているか、また詩語に対応しないピアノのみの部分はどのような意味をもつのか。さらに『冬の旅』全曲の中で『おやすみ』がどのように位置づけられるのか。詩の展開に沿いつつ、作曲形式、調性・転調、前奏・後奏などの分析を通じ、詩という素材が音楽を得て昇華するありようを探る。

4) ドイツ語・日本語政治討論と論証様式

宮内 敬太郎

言語を主軸としたコミュニケーションは各社会で人間関係を成立させ、維持、調整、発展させる不可欠な役割を果たしている。この言語活動およびこれに結びついた非言語行動には、各言語共同体で歴史的に形成・蓄積された優勢な文化的特性を反映して形成された種々の「社

会的仕組み」が現れている。その具体的な例としては場に応じた話題の選定、発言権の順序、発話の重複と発話交替、同意、反対などを表明する相槌の打ち方、発言の修正等の「仕組み」や、“politeness”に配慮した物の言い方、自己主張などに代表される思考の進め方等の様式を挙げることができる。

本研究では対面相互行為の一形態と位置づけられる対話のうち、ドイツ語母語話者と日本語母語話者である政治家が展開する政治討論に表れる論証様式に焦点を合わせて、異文化コミュニケーションの視点から対照的な考察を行う。論証様式に関しては、自己主張を行う際、初めに結論や要点を述べたうえで、その後に根拠づけを行うのが一般的な様式か、あるいは最初に本題に関する背景等の説明した後に結論を述べるスタイルが一般的か、あるいは、これに近い思考法でも、結論は言語表現せずに相手に察知させる談話様式が支配的かといった差異が社会によって存在すると推論できる。本発表ではドイツ語では結論を冒頭に提示し、その後に根拠付けを行うパターンが一般的であり、日本語母語話者の場合は、背景説明や理由づけが初めになされ、その後結論を述べるか示唆するに談話様式が優勢であるという仮説を設定する。この枠組みにおいて自己の意見提示とその根拠づけ、発言権の引き取り方、反論、同意等を表明するには、どのような言語慣用が、いかなる構成で用いられ、そこにどのような構造的性が認められるか、そして言語行動に付随して現れる発話者・聞き手の視線、顔の動かし方など非言語行動も視野に入れてビデオ録画された言語資料の観察を行い、それらにどのような意味が付与されているかを特定・解明しつつ、実証的な記述を行う。

分析に際し、ドイツ語言語資料に対しては「談話分析」「会話分析」の両パラダイムを基盤に据えた「ジュネーブ・モデル」(J. Moeschler:1994)を援用し、これに修正を加えた言語モデルを用いる。日本語政治討論に関しては、南不二男(1972, 1987)、P. ザトラウスキー(1993)、泉子・K・メイナード(1993, 1997)等の方法論を参考にして開発した分析モデルを用いて考察・記述を行う。

なお本研究は平成16年度、17年度科研費の助成を得て推進されている。

5) ヘルマン・コーヘンにおける知識の体系と宗教

向井 直己

ヘルマン・コーヘン(1842-1918)の著作の研究は、こんにちではその哲学的含意を問題とするのみならず、そこに色濃く反映されている時代的・社会的制約を取り上げることにも意義がある。世紀転換期という錯綜した時代、そして同化ユダヤブルジョワの思想の研究としての意義である。

発表は、1)まず彼の思想の形成期に立ち戻り、彼のカント論の検討を通じて、『純粹認識の論理学』(1902)から続く一連の哲学体系を、専ら知識の体系として、即ち学的認識の体系として特徴付ける。2)続いて、彼の晩年期に目を向け、ユダヤ教を軸に展開された宗教哲学的思索によって、この知識の体系が被った変容を問題にする。ユダヤ教において発見された神の唯一性という概念は、学的認識の統一性、更には諸学の認識の統一性の最も根源的な源泉とされる。

焦点となるのは、学的認識が要求する普遍妥当性と、特殊的宗教が継承してきた宗教的知識の妥当性との間にある関係である。コーヘンは両者の何れをも放棄せず、むしろそれらを曖昧に結び合わせながら、ドイツ的な精神とユダヤ的な精神との間にひとつの統一を構想していた。

この構想は同時に「一般市民」の社会と特殊ユダヤ的共同体との間に立って統一を夢見た 19 世紀の同化ユダヤ人の夢を引き継いでいる。コーヘンの一連の著作は、この夢がひとを捉える際に働いていた、ひとつの曖昧な論理を形象化するものでもあるだろう。

ポスター発表(10:00~13:00)

G 会場

音声コミュニケーション中心の少人数授業で学習者は何を学んでいるのか? 「ドイツ語チュートリアル」の試み

星井 牧子

生駒 美喜

室井 禎之

Michael Schart

井口 三奈子

「学習者4～5名に母語話者1名がチューターとして加わり、会話中心の授業をした場合、学習者のドイツ語はどう変わるだろうか？」わたしたちは以上のような素朴な疑問から出発して、現在研究プロジェクトを進めている。このプロジェクトは、少人数授業でのコミュニケーション活動とドイツ語学習者の発話を多角的にとらえ、日本語を母語とするドイツ語学習者の習得過程とこれに関わる諸要因を実証的に解明することを目的としている。本発表では、1)この研究プロジェクトの概要およびデータ収集の方法、2)ベースとなる少人数授業のコンセプトと運営、について紹介する。

本発表でとりあげる研究プロジェクトでは、「音声コミュニケーション中心」「少人数での授業」「ドイツ語チューターをつける」という条件のもとで、日本語を母語とするドイツ語学習者の発話行動にどう変化がおきるのかを、

- 授業内の発話データ
- 毎週提出される課題
- コース開始時と終了時の会話データ

等を用いて調査している。さらに学習日誌や毎回の授業の感想なども分析の対象とし、学習者の学習行動を追跡するとともに、チューターの発話行動とその変化も調査対象に加えている。

少人数で行われる「チュートリアル方式」の授業は、早稲田大学ではドイツ語に先立ち、英語および中国語の授業で導入されているが、本発表ではそれらの成果も踏まえながら、「ドイツ語チュートリアル」の授業コンセプトと運営についても紹介する。

本報告で取り上げるプロジェクトは現在進行中のものであるが、調査の概要とプロジェクトで得られた結果の途中経過を報告することにより、ドイツ語学習環境と学習プロセスを総合的に調査する際の可能性や問題点を議論する契機にしたい。